◇　松江教育事務所報　令和７年度　第２号　◇

教育事務所だより

令和７年１２月８日発行

未来の先生たちに期待を込めて　－教師塾を参観して思うこと

調整監　　前島　美佐江

8月と9月の二日間、島大教師塾の様子を参観させてもらう機会がありました。島大教師塾は、島根大学が教職志望の大学生や高校生を対象に行っている、独自の人材育成プログラムです。9月の教師塾では、附属義務教育学校を会場に、教育実習生の授業を高校生が参観し、その内容をもとに高校生と大学生が座談会を行っていました。

熱心に質問をする高校生の姿も印象的でしたが、それ以上に、コーディネーターとして参加していた大学生の共感的に話を聞こうとする姿勢に感心しました。単に言葉を受け取るのではなく、相手の気持ちや背景に意識を向け、寄り添って聴こうとする態度が感じられました。教育の場では、子どもの言葉の奥にある感情や悩みに耳を傾け、「あなたの気持ちを大切にしているよ」というメッセージを、態度や言葉で伝えることが重要です。教師塾は、そうした教師として大切な資質を養う場になっていると感じました。

さて、島根県では令和7年度から新たに「しまね教育振興ビジョン」を策定し、島根らしい魅力ある教育の推進を目指しています。このビジョンでは、「誰もが、誰かの、たからもの」というキャッチフレーズのもと、地域の自然や文化といった資源を生かし、学校・家庭・地域が協働して、一人ひとりの個性と多様性を尊重する教育の推進が掲げられています。

こうした教育の中核を担う教師にとって、人との関わりや本物に触れる体験を通じて、自分自身の変化や成長を実感することは非常に重要です。今回参観した教師塾も、教職を目指す高校生や大学生にとって、貴重な経験の場となっていました。こうした経験を積み重ねながら、子どもたちと真正面から向き合う志ある若者が、今後も多く教職を目指してくれることを願っています。

わかもの「高校生演劇グループ『あめいろ』」の活躍から私たちにできること

社会教育スタッフ　社会教育主事（兼）企画幹　　山田　祐司

8月1日（金）に松江教育事務所管内社会教育士等研修会［【通称】松江わわわ（和・話・環）］研修を東出雲公民館で実施しました。この研修は、地域で活躍している方と、管内の社会教育主事（有資格者含む）、社会教育に関心のある方をつなぎ（環）、みんなで和やかに話をする取組です。

あめいろ
前事務局長　　副会長
渡部千晶さん　竹本莉乃さん

今年は、高校生が中心となって結成した演劇グループ「あめいろ」の方に3年間の取組を話してもらいました。発表された内容を以下5点にまとめました。

☞「あめいろ」の結成の場所は、中学校のときに訪問した「おちらと村」だった。
☞自分たちが楽しむ演劇が、地域を盛り上げることにつながった。
☞地域の方に取材をしていくなかで、地域の温かさを感じた。
☞公演の際はたくさんの地域の方に支えてもらい、この上ない達成感を感じた。
☞地域の魅力や面白さを発見でき、将来的には市内 29 の公民館区で演劇公演を開催したいと考えるようになった。

各学校でのふるさと教育が展開されているところですが、子どもたちが地域とつながる有用性を「あめいろ」の取組で強く感じました。そして、ただつながるだけでなく、そこに何かしらの仕掛けがあると、お互いが更に高め合えると感じました。子どもたちは地域で支えられ、地域で育てられることがよくわかる「あめいろ」の取組でした。学校と地域の連携、開かれた教育課程の実現に向けて、松江教育事務所として今後もしっかりサポートしていきたいと思います。

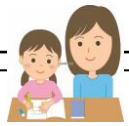
“つながる”不登校支援の取組　～子ども・保護者の思いに寄り添って～

松江市派遣指導主事　名目良　美穂

松江市は、年々増加している不登校の児童生徒や保護者と“つながる”取組を継続して実施しています。

松江市教育支援センター『松江市青少年相談室（ふれあい教室）』

登校等が難しい児童生徒が内中原町にある青少年相談室に通室し、対面でつながる支援です。小集団を中心に、学習や体験活動等を行っています。小学校の低学年から中学生まで、自分のペースで活動しています。休憩時間には、通室生同士の交流も見られます。毎月活動の様子等を学校へ伝え、連携を行っています。



訪問型支援員派遣『こねくと』

家に閉じこもりがちな児童生徒等を対象に、支援員を自宅等に派遣し、個別に対面でつながる支援です。支援員は主に大学生で、週に1回1時間程度、子どものニーズに合わせた学習や活動を行います。学校を通して、「こねくとの日を楽しみにしている」、「学習に取り組む気持ちが出てきた」という声を聞いています。

オンライン学習支援『ボタンねっと』

登校等が難しい小学5年から中学3年の児童生徒を対象に、オンライン上でつながる支援です。各教科に関する授業や動画配信、屋外からの中継等を行っています。リアクションやチャットを通して、参加者同士のやりとりも見られるようになっています。

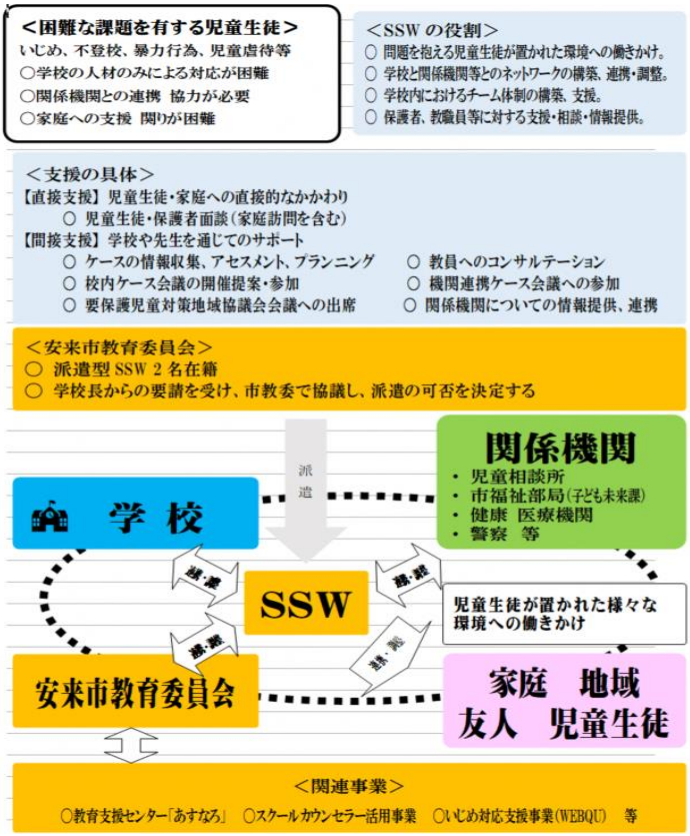
保護者の相談の場として、『スクールカウンセラー相談センター』や『子どもを語る会』を実施しています。

子どもや保護者の思いや状況等によって、支援はさまざまです。子どもや保護者の思いをその都度把握し、ニーズ等に寄り添った不登校支援を学校と連携し、推進していきたいと考えています。

スクールソーシャルワーカー活用事業について

（安来市 SSW 活用事業図）

安来市派遣指導主事　竹田　政博



安来市では、スクールソーシャルワーカー（以下、SSW）活用事業について、左図のように事業を展開しています。課題として、教職員や保護者、児童生徒の本事業への理解が進んでいないことがあげられました。そこで、今年度は、指導主事と SSW とでの学校訪問、校長連絡会での説明、活用事業に係るチラシの配布、月に 1 回のケース検討会を重点として取り組んできました。このことで、学校からの派遣依頼が、前年度と比べ増加したことが効果としてあげられます。一方で、保護者への周知には未だに課題があります。安来市として、SSW に係る保護者への理解を深め、保護者が相談しやすい環境の構築をめざし、施策を進めていきたいと考えています。

インクルーシブ教育の視点における授業づくり講座について

松江市派遣指導主事　梅田　英樹

エスコでは、特別支援学級を担任する先生方に高めていただきたい力を、主に「実態把握」、「授業づくり」、「学級経営」の3つの力と考えており、今年度は「インクルーシブ教育の視点」から、授業づくりのあり方について研修を実施しました。交流学級の担任等、関係する先生方にも多数参加いただきました。

島根県立大学人間文化学部 保育教育学科准教授 水内 豊和 先生を講師として、「子どもの困りに寄り添うことから始まる教育・支援－見方をかえて味方になるために－」をテーマに、7月31日に研修を開催しました。

＜講座の概要＞

・交流及び共同学習で大切にしたいこと

交流及び共同学習は、相互のふれあいを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があり、この二つの側面を分かちがたいものとして捉え、推進していく必要がある。

・特別支援学級の授業づくりがインクルーシブ教育の視点で大切であること

障がいのある子ども、ない子ども、どちらか一方が我慢を強いられないように、方法論に子どもを合わせるのではなく、子どもに方法論を合わせてほしい。

・実態把握の大切さとそこからの授業づくり

「～ができない」という実態把握、「～をしない」という目標設定では、変化が見えにくい。手立てを考えるために、子どもの「見方」を変えて、子どもの「味方」になってほしい。

＜参加者の感想より＞

・普段行っている活動や指示ひとつにしても、こちらが思っているとおりに正しく伝わっているとは限らないことに改めて気づいた。言葉や文章だけではなく、様々な伝え方をすることで少しでも子どもたちの困りやつまずきをなくしていきたいと思った。

・言葉を使わなくてもコミュニケーションをとることができる。相手によってコミュニケーションの仕方を工夫することが大切。これから褒めるときも名前をしっかり呼ぶことを実践したい。

※来年度も「インクルーシブ教育の視点における授業づくり」をテーマに、水内先生の講座を開催する予定です。

LD のある子どもの多様な学び推進事業の取組（一年次）について

安来市派遣指導主事　青砥　玉枝

安来市では、「LD のある子どもの多様な学び推進事業」に取り組んでいます。通常の学級に在籍する学びにくさのある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた多様な学びを実現させるため、島根県の LD 支援担当指導主事や LD 支援アドバイザーとの連携を図って、LD に対する理解と支援力の向上を図り、児童生徒の実態に応じた多様な学びが保障されるように支援体制づくりを推進しています。

①小学校の取組

〇市内全小学1年生を対象とした「ひらがな読み早期改善支援」の取組

・研修会「ひらがな読みの早期改善支援に係る研修会」（5月27日）

〇事業協力校；十神小学校

・内容：ひらがな読みの実態把握から、学級全体で「語彙を広げる」短時間活動の実践

研修会「多様な子どもの主体的な学びを支える授業づくりのために」（8月27日）

②中学校の取組

〇事業協力校；広瀬中学校

・内容：多様な実態の生徒が主体的に学ぶ授業づくりの実践

研修会「ユニバーサルデザインの教材づくりを通して」（8月22日）

実践研究「授業公開と意見交換」（10月9日）

③通級指導担当者の取組

〇研修会「LD のある子どもの通級における自立活動について（事例研修含む）」

学期に1回ずつ（7月16日・10月22日・2月25日）

④安来市特別支援教育夏季研修会（8月26日）

「学びあい支えあい講座」の取組について

松江市派遣社会教育主事　川神　拓人

この講座は、児童クラブや放課後こども教室、放課後デイサービスの関係者を対象としたもので、年10回市民活動センターを中心に開催しています。普段放課後の子どもたちを支援したり見守ったりしている方々が、子どもたちと関わるうえで必要な知識・技能を身につけ、子どもたちが安心して過ごすための対応を確認したり、各所のスタッフ同士で情報交換したりしています。講義や体験、ワークショップを通して参加者同士の横のつながりづくりにもなり、毎回好評をいただいています。

【救命救急】

実際に子どもたちをイメージして、AED の操作や細かい動きも体験しながら学んでいます。

【毎回の情報交換】

グループで近況報告したり講座の内容について学んだことや感じたことを共有したりする時間が一番盛り上がります。

【講義】

真剣にメモを取りながら学んでいます。

講座の様子等も掲載されている社会教育主事通信「縁～えにし～」もチェックしてみてください!!

安来市コミュニティ・スクールの取組から

安来市派遣社会教育主事　高尾　康弘

安来市は、昨年度3学期までに、すべての小中学校に学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールとして「地域とともにある学校」を目指し動き始めたところです。各学校運営協議会は、学校の運営方針の承認をするといった決められた役割を果たすとともに、学校運営に必要な支援に関する協議も行いました。

児童数の少ない学校では、「より多くの地域の方に学校に入っていただき、児童のコミュニケーション能力を高めたり、いろいろな経験をさせたりしたい」という願いを話し合ったところ、学校図書館を地域に開放することで地域の方が学校に寄る機会をつくってはどうかという話になりました。学校にも地域にもウィンウィンの提案です。学校側は図書館開放のルールをつくるなど準備を進め、10月1日から、学校図書館の地域開放をスタートさせました。となりにあるこども園にも開放をすることで、幅広い人的な交流が望める取組となりました。　（写真上：図書館のルールを聞く地域の方々、下:年長さんと一緒に本探しをする児童）

また、学習支援のボランティアをどんどんお願いしたいという学校の願いを受け、交流センターの協力を得てボランティアを募り、初めて毛筆の学習をする3年生の授業の補助を今年度から実施した小学校があります。その学校の第2回の学校運営協議会では、その成果や課題について話し合われ、今後はさらに、九九や音読の聞き取り補助、図工で刃物を扱うときの補助などへもひろげていくことなりました。

このように少しずつ目に見える取組が始まっているところもあります。学校の状況により、学校運営協議会で取り上げられる話題は様々です。それらについて、学校だけでなく、地域・保護者が共通の理解をしたうえで、一緒になって、あるいはそれぞれの立場で、何らかの取組が進んでいく、そんなコミュニティ・スクールになるよう教育委員会では伴走をしていきます。